

まえがき

農業は、人類の生存にとって不可欠な食糧を生産することを最大の任務とした活動であり、それを支えるのが応用学問としてのこれまでの農学であったといえます。わが国の農業は、第二次世界大戦前の労働集約型の構造から、戦後のいわゆる「近代農業」と称される化学化や機械化などを武器とした大量のエネルギー・資源投入型の構造へと大きな変貌をとげてきました。この結果、狭義の生産性は向上しましたが、以前にはほとんど想定されていなかった状況、例えば環境問題の深刻化なども近代化にともなって顕在化してきました。欧米の先進技術や思想を国策として急速に移入しようとしたわが国の農学は、それもわずか百年程度の歴史しかもたないものですが、高等教育として大学農学部（それらの多くは旧農業専門学校を前身とする）が、この間の人材育成や研究を担ってきました。現在、わが国の大学における学生総数の約 3% が農学関連に在籍しているといわれます。

最近になり、社会的要請による「改革」や「大綱化」にともなって、多くの大学農学部が従来の比較的分かり易い縦割り型の学科構成やカリキュラムを変更して、どちらかというところ専門横断的あるいは総合的な方向を強めてきた感があります。大学院重視も、大学間に共通する潮流の一つになっています。最近では環境問題に対する視点、農業療法やコンパニオン生物などに対する視点、国際化に対する視点、食糧生産だけでなく広義の生存環境にも寄与できる視点などを含めて、農学の守備範囲が従来以上に多様化・複雑化・高度化しているといっても過言ではないでしょう。

本書は、上述したように、20 年ほど前から何となく変わってきたのではないかと直感される農学教育の変貌を具体的なかたちとして把握するために、「農学教育カリキュラム」に注目し、それらの変貌の一端を解析しようとしたものです。結果論になりますが、このような作業を進めたことにより、想像以上にわが国の大学農学部組織や農学教育カリキュラムが変貌している実態が明らかになってきました。

本書は、かつて筑波大学に在籍したあるいは現役の教官らが中心となって執筆したのですが、いずれの執筆者も、個々の専門分野は異なっても、農学教育に日頃から強い関心を抱いている方々ばかりです。本書では、「日本の大学における農学教育カリキュラムの現状と課題」と称する内容を中心に置きました。旧東京農業教育専門学校、旧東京教育大学農学部、筑波大学生物資源学類という一つの大学農学分野が辿ってきた道を手近な例としながら、多少とも一般化させる意味で、日本の農学教育が辿ってきた道に関して各執筆者が補完

したものです。

独立行政法人化の動きが急速に具体化しつつある現在、しかも農学に関して激変期にある今このような作業をだれかがやっておかなくては、永久に貴重な歴史遺産を失ってしまうのではないかという懸念から出発したもので、もとより広範な農学全体を網羅するような内容でないことは当初から覚悟しています。この点に関しても、読者の方々にご理解と教示を賜れば幸いに存じます。

このような息の長い仕事は、地道に時間をかけて集大成すべき仕事であるとは理解しているつもりですが、今回、筑波大学開学 30 周年という節目に合わせてかたちで敢えて中間まとめ的な内容として刊行することにしました。現段階で、多少とも農学の現在や将来に役立つ部分があるとしたら、執筆者一同の望外とするところです。

最後に本書の刊行に際して、全国国公立大学農学関係学部には大量の貴重な資料を毎年定期的に送付していただきました。そのことがなければ、本書の刊行は実現しませんでした。ここに記して謝意を表します。

平成 15 年 3 月 31 日

筑波大学農林技術センター長

坂 井 直 樹